

非文字資料のデジタル化と歴史研究

近世画像資料を背景として

富澤 達三

はじめに

今日、情報化社会の中で映像メディアが日常生活の諸領域に深く浸透し、人々の価値観や文化、芸術のあり方を大きく変容させている。しかしながら、このような日本における視覚的な情報媒体の浸透による社会変容は、決して近現代になって初めて起きたわけではない。すでに19世紀の江戸では、錦絵や草双紙などの視覚媒体に媒介された社会意識の変化は広範囲に起き始めており、今日のメディア文化状況を把握するにも、こうした歴史的な視点からの考察は不可欠である。

著者は、幕末維新期には錦絵（浮世絵版画）の新ジャンルとして「時事錦絵」とも呼びうる新領域が開拓され、錦絵による時事情報の伝達・江戸庶民による情報メディアの購買が、一種の社会運動としても位置付けられると考えた。現在「時事錦絵」や「かわら版」が、明治期の新たな庶民メディア（写真・石版画・絵はがきなど）に淘汰された事実、庶民メディア自体が持つ娯楽の側面の社会的な意味の解明、政治が庶民の視覚的欲望を利用・統制していった過程を、実証的に研究している。

I 画像資料のデジタル化と歴史研究

(1) 人文系研究者とパソコン技術

本プロジェクト「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に参加中、インターネット・パソコン環境は劇的な変化を遂げた。個人研究者のほとんどがパソコンを使って論文を作成し、35mmスライド投影機での画像投影はすたれ、パソコン画面をそのまま映す小型プロジェクターが主流となった。理科系の研究発表では、ごく一般的に使われるプレゼンテーションソフト（パワーポイント等）は、文科系の研究発表や授業でも

活用され、静止画・動画・文字を効率よく投影することが可能となり、もはや人文系の研究者にも必要不可欠な技術となりつつある。

また、デジタルカメラによる撮影も一般化した。フィールドワークでは、古文書や画像資料・景観を撮影した際、撮影結果の良し悪しをすぐに確認することができるデジカメは大変便利⁽¹⁾である。近年は一眼レフタイプでも、撮影枚数オーバーや電池切れの心配も無くなった。モノクロ画像や小型カラー図版に使う程度ならば、論文でも使用できる十分な画質を得ることができる。

そしてデジタルビデオも飛躍的に高性能化・低価格化が進んだ。著者が過去に勤務した博物館の特別展では、デジタルビデオで撮影した数時間にわたるフィールドワークの動画素材を編集し、テロップと音楽を入れ、約20分間のビデオを作り好評であった。デジタル機器の進化を痛感するとともに、博物館学芸員には、写真技術はもちろん、ビデオの編集能力すら求められる時代が到来したことを感じた。

(2) 画像資料の整理と研究

著者が東京大学社会情報研究所（現、情報学環）の吉見俊哉氏の研究室で、同研究所図書室が所蔵する「小野秀雄コレクション」のうち、かわら版約600点・錦絵新聞⁽²⁾約400点の整理作業に本格的に従事したのは、1996年のことであった。当時、パソコンはアップル社のマッキントッシュが主流であった。そして、資料を旧目録と照合・整理し、撮影したフィルムと全文解読データをデジタルデータベース化し、インターネットで一部を公開するという計画上、「画像処理に強いパソコン」と評判の高いマッキントッシュを使った作業が始まった。現在はパソコン本体や各種ソフトの価格は大幅に安くなっているが、当時は個人で研究用のパソコン、プリンター、画像加工・データベース用ソ

フトなどを揃えることは資金的に厳しく、私にとって願ってもない機会となった。しかしながら、技術的には試行錯誤の連続であった。

特に、著者は画像資料のフィルム撮影はまだしも、デジタル化に関しては知識が乏しかった。そこで当時、東京大学地震研究所が、35mmフィルムで撮影した『鯨絵』の画像をデジタル化している、という情報を北原糸子氏より教えていただいたので、何度か東大地震研図書室に足を運び、ノウハウを教えていただいた。

現在は高性能かつ低価格のフィルムスキャナーがあるため、35mm・ブローニー判・4×5判のフィルムを、個人でパソコンに取り込むことができるが、1996年当時は大型店でコダック社などがポジフィルムをデジタル化するサービス（Photo-CD）があり、35mmフィルム1枚のデジタル化に120円程度かかった。ブローニー判、4×5判では1枚数千円であり、数百点を超える発注は、個人研究者はもちろん、研究機関にとっても大きな出費であった。幸い、日本マイクロ社（現、ニチマイ）が「カラーマイクロ」という、カラーフィルム撮影とデジタル画像化を同時に行う、当時としては比較的安価な方法を提示してくれて、大変助かった。現在ならば、高性能のデジタルカメラで直接撮影する方法が、安価で高精度のデータを得る方法であろう。また、錦絵のようにB4判程度の大きさの画像資料ならば、直接大型スキャナーで取り込む手段もある⁽³⁾。

前述のように、東大社情研のかわら版・新聞錦絵（錦絵新聞）は、図像を撮影し、デジタル化して紙焼きするだけでなく、絵の周囲に彫刻された文章も全文解読しデータベース化する計画であった。図像と文章情報を統合したデジタルデータベース作成作業は、アドビ社のフォトショップでデジタル画像を作り、ファイルメーカー Pro.で書誌情報や解読文章などを統合した。全文解読と入力作業は、独力では難しく、山本拓司氏・田中葉子氏をはじめとする大学院生の方たちに協力を仰いだ。この間、展示プロジェクトのための研究会も立ち上がり、最終的な成果は東大総合博物館での展示『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』（1999年10月8日～12月12日）、CD-ROM『ニュースの誕生』（アルケリサーチ、2000）などで結実した。著者は一連の作業を経験することによって、博士論文執筆の基礎データを収集することもでき、画像資料のデジタル化→解析→論文化の流れをつかむことができたのである。

その後、パソコン本体やカラープリンター・ハードディスクをはじめとする、周辺機器の高性能化と低価格化が年々進み、高画質のデジタル画像を大容量ハードディスクに蓄積することは容易になった。そして、大学などの研究機関で所蔵する画像資料のデジタルデータベース公開も進んだ。国立国会図書館・東大史料編纂所・国立歴史民俗博物館・早稲田大学演劇博物館・立命館大学などが高精細の画像をインターネット上で公開し、ネットの高速化によってストレス無くカラー画像を閲覧することが可能となった。本COEプログラムのパソコン端末で、全国の錦絵・かわら版資料を調査し、数百点を超える画像データの加工とデータベース化なしでは、自著『錦絵のちから』の刊行は難しかったと断言できる。

Ⅱ 画像資料を用いた庶民文化史研究

(1) 「時事錦絵」の定着

江戸幕府は巷の重大事件や政治的情報を書籍はもちろん、錦絵（浮世絵版画）や草双紙庶民むけ出版物の題材とし、不特定多数の人々に伝えることを禁じていた。しかし幕末維新期には、開国に端を発する政治的混乱や出版物の増加によって検閲も緩み、江戸の重大事件を扱った錦絵が登場する。なかでも安政2（1855）年10月2日の安政江戸地震の直後から数カ月間にわたって出版された『鯨絵』、文久2（1861）年江戸での麻疹流行を数カ月間描いた『はしか絵』は、「時事錦絵」⁽⁴⁾とも呼びうる錦絵の新ジャンルを定着させた。「時事錦絵」は単に事件の推移を数カ月間継続的に描いたのではなく、絵自体が「地震除け」や「はしか除け」のまじない絵であり、災害や病に関する民俗的な知識や、合理的医学知識を絵や文字で伝えたものであった。

幕末維新期、従来は際物⁽⁵⁾の錦絵作品であった「時事錦絵」も定着し、慶応期になると従来は決して描くことができなかった、政治的な話題を取り上げた作品も登場した。旧幕府側と薩長新政府の抗争を、子どもたちの合戦として錦絵に描いた「子供遊絵」「大人遊絵」である⁽⁵⁾。著者もいわゆる「かわら版」や『鯨絵』『はしか絵』⁽⁶⁾などの悉皆調査とデータベース化を行い、文献資料と照合することで、分析的な記述を行ってきた。現在もこの試みを継続しており、将来は数千件を超える「時事錦絵」の文章情報・書誌情報と画像の読み解

きを統合したデジタルデータベースを、DVD-BOOKないしは研究機関のサーバーを使ったWebによる公開を目指している。

(2) 「時事錦絵」としての錦絵新聞

錦絵新聞とは、明治時代の新しいメディアである新聞紙の記事を情報源とし、錦絵化した情報媒体である。嚆矢は、明治7年8月に東京の地本問屋・具足屋から出版された錦絵版『東京日々新聞』で、明治5(1872)年に創刊された日刊の大新聞(政論中心の知識人向け新聞)『東京日日新聞』の記事を基にした錦絵である。絵を担当した一蕙斎(落合)芳幾は『東京日日新聞』を発行する日報社に糸野伝平(山々亭有人の号を持ち、日本画家・鏑木清方の実父)・西田伝助(貸本屋番頭)らとともに加わっており、錦絵版の文章も山々亭有人らが手がけた。内容は殺人・巷の珍事件・孝子の褒賞など、人々の好奇心を満たすものが多く取り上げられている。

錦絵版『東京日々新聞』のデザインは、2人の天使が「東京日々新聞」と書かれたリボン状のタイトルを持ち、全体を鮮やかな赤色で縁取っている。赤枠の内側はさらに細い黒線で縁取られ、額縁を思わせる表現となっている。幕末期、外国との貿易が始まり化学染料の洋紅が輸入されると、安価で発色が良く、扱いやすいこの赤色は錦絵に多用された。現在でもこのアニリン赤の毒々しさを嫌うコレクターや研究者もいるが、「開化の赤」として文明開化期の錦絵を象徴する色であったことは間違いない。なお、作者の芳幾は錦絵に赤い枠を使った表現を役者絵で試みている⁽⁸⁾。タイトルを支える天使の像は、錦絵版『東京日々』の開版予告から登場している。明治初期には、膨大な数の外国出版物が日本に流れ込み、それらに描かれた天使の図像を、芳幾本人もしくは彼のブレンがを見つけ、文明開化の新時代を感じさせるイメージ⁽⁹⁾として、使用したと考えられる。

明治8年になると、東京では錦絵版『郵便報知新聞』(大蘇芳年画)、『各種新聞図解』(小林永濯画)などが出されて大ブームとなった。錦絵新聞ブームは大阪・京都にも波及し、大阪では30種類以上の錦絵新聞が続々と出版されたのである。現在までに約800点の錦絵新聞が確認されている⁽¹⁰⁾。

現在、著者は過去の経験を生かし、独自のカード型データベース(図1)を作り分析を進めている。錦絵新聞



図1 錦絵新聞のカード型データベース(ファイルメーカーによる)
タイトル・絵師・出版年月などの書籍データと全文の解説文章を統合したもの。

も「時事錦絵」の一種と考えることができ、錦絵新聞のなかに描いた民俗的世界の解明やメディア史的意義は、研究史をふまえ、更に詳細に解き明かされていくだろう。

(3) 錦絵新聞か新聞錦絵か

約800点の市井のニュースを伝えた画像資料の呼称には「錦絵新聞」「新聞錦絵」の2つがあり、確定していない。公的記録や関係者の聞き取りには「錦画新聞」「錦絵新聞」の語が見られる。大阪で絵のみならず記事も手がけた浮世絵師・二代目長谷川貞信は「錦画新聞」と呼んだ⁽¹²⁾。また、『大阪日々新聞紙』の筆禍事件の推移を明らかにした原秀成氏の論文では、大阪中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第七巻・出勤帳(清文堂、1985。121頁以下)の記録に「窺願のない錦絵新聞は売買を禁止するので、許可を受けるように」との指示が大阪府学務課から出されていた事実が指摘されている。そして1920年代の明治文化研究会では錦絵新聞とし、宮武外骨も錦絵新聞の語で統一している。

一方、新聞史研究者の小野秀雄(1885-1977)は、東

京で発行されたものは新聞紙からの引用であり「新聞を絵解き」した性格が強いとして「新聞錦絵」とし、大阪発行の作品は、新聞紙の記事に依らない独自の連番を持った「錦絵新聞」であるとした。小野の著書『新聞錦絵』（1972）以降、新聞錦絵の用語が広まる。ジャーナリズム研究会による図録『新聞錦絵 文明開化の事件簿』（1986）や、小説家で浮世絵研究者の高橋克彦氏は新聞錦絵の語を使っている。

近年では佐藤健二氏が「モノとしての属性」（大きさが江戸時代に最も一般的な大判錦絵＝約36×26cmのサイズであること、絵師・彫師・摺師の分業体制で制作されたこと、地本問屋から出版されたこと）、嚙矢となった錦絵版『東京日々新聞』が新聞記事を錦絵化する原型を作った歴史的事実等を重視し、すべての作品を「新聞錦絵」の呼称で統一すべきだとする。なお土屋礼子氏は、錦絵新聞の「錦絵としての属性」を認めたいうえで、たとえ生産の実態が新聞記事の錦絵化であっても、読者たちはこれを「ニュース媒体」としてとらえ、その受容を通して文明開化の新メディア「新聞」を認識したのだと問題提起の意味を込めて、総称として「錦絵新聞」の語を使用するとしている。⁽¹³⁾

ところで、小野秀雄の著書『新聞錦絵』では、読者の理解を助けるため、絵の内容を短い文章で要約し示した。この方法は以後定着し、前出のジャーナリズム研究会の図録でも、全ての絵に要約文がつけられ、高橋克彦氏・土屋礼子氏もこの方法をとっている。しかしながら、元記事のほとんどに見出し文はなく、錦絵新聞の詞書にタイトルが入るのも、大阪の錦絵新聞流行末期になってからである。

(4) 新聞紙元記事と錦絵新聞の関係

錦絵版『東京日々新聞』には、タイトルの左に縦で号数が書かれているが、これは発行順を示しておらず注意が必要である。出版順は「改印（あらためいん）」から判断しなければならない。「改印」とは錦絵出版の際、業者の自主的な検閲を通った作品に押された印で、これから錦絵の出版年月を知ることができる。錦絵新聞にも改印があり、錦絵版『東京日々新聞』の場合、明治7年8月（戊八）の印が最も早い。本論では、現在までの改印の解説に基づいたリストを示す（表1）。なお、東京で出版された錦絵新聞には改印から発行年月が判明する作品もあるが、大阪出版の錦絵新聞には改印はなく、出版年月を知ることができない。また、明

治8年9月の出版条例改正により、錦絵の改印制度は終わり、出版年月・出版者・絵師の本名を彫刻する方式へ替わった。

幕末維新期の「時事錦絵」は、江戸幕府の出版統制のもとで、江戸の大事件を「はんじもの」や「戯画」で伝えていた。しかし錦絵版『東京日々新聞』は、いわゆる5W1H—Who（誰が）、What（何を）When（いつ）Where（どこで）Why（なぜ）How（どのように）—を、絵と文章で即物的に伝えた「時事錦絵」である。新聞紙の情報に基づく錦絵版『東京日々新聞』は、人々に新たな情報のありようを見せつけた。新聞紙上で報道された事件を錦絵化し、5W1Hをはっきりと伝える手法は、錦絵版『東京日々』を追随し、明治8年1月ごろから東京で出版された錦絵版『郵便報知新聞』でも踏襲されていく。「時事錦絵」は実名・住所の記載が当たり前となる、新たな段階を迎えたのである。

(5) 錦絵新聞のゆくえ

錦絵版『東京日々新聞』は、開版予告で「各府縣下の義士貞婦・孝子の賞典・兇徒乃天誅・開化に導く巷談街説」を中心に描くとの方針を、明確に打ち出した。かつての「子供遊絵」のように婉曲的に描かれた内乱・戦争も、錦絵新聞のなかでは実名・事件地名が書かれた。佐賀の乱のリーダー江藤新平の捕縛・明治時代初の対外戦争である台湾出兵を描いた作品は地名・人名はすべて実名である。

錦絵版『東京日々』の登場人物は、市井の庶民であった。高位高官が起こした事件は、取り上げられていない。明治初期の大新聞では、支配階級の起こした事件を報じることが少なかったためであろう。また錦絵は売って利益を上げるための商品であったから、お上ににらまれる高位高官の起こした事件は、錦絵新聞にされなかったと考えられる。

描かれた事件のほとんどは現実に起こった出来事であり、絵の主役は実在の人物であった。視点は「人間」に向けられ、事件の決定的瞬間を人間の行為で描いている。彼らは、放蕩生活や不倫・痴情のもつれ、家庭不和などが原因で人を殺め、被害者となった。一方、何の落ち度もない善男善女が犯罪に巻き込まれる恐ろしさを描くものもあった。

人々の感動を誘う「孝子・孝婦もの」での主役は、錦絵新聞を買い求めた庶民たちの隣人であり、事件の原因は日常生活のうちにごく普通にあったものであり、

表1 錦絵版『東京日々新聞』一覧表

	題名	改印	元記事()は正しい号	内容(土屋礼子氏ほかの著作を参考)	絵師	版元
1	東京日々新聞 開版予告	7年8月以前	なし	開版予告	一憲斎芳幾	具足屋
2	東京日々新聞 二二〇号	7年8月	5年10月26日	悪漢茂吉と毒婦つまが護送中に逃亡	一憲斎芳幾	具足屋
3	東京日々新聞 四百七十二号	7年8月	6年9月28日	船員政吉が難破船内で書いた遺書が米国経由で戻る	一憲斎芳幾	具足屋
4	東京日々新聞 四百四十五号	7年9月	6年8月7日	三つ目に化けた古狸を退治	一憲斎芳幾	具足屋
5	東京日々新聞 四十号	7年9月	5年4月4日	九代目田中郎の弁慶に感動の洋人が写真を所望	一憲斎芳幾	具足屋
6	東京日々新聞 五十号	7年9月	5年4月13日(48号)	明治五年北越頑民の一揆が発生	一憲斎芳幾	具足屋
7	東京日々新聞 百一号	7年9月	なし	死霊となっても子に乳を与える母	一憲斎芳幾	具足屋
8	東京日々新聞 七百三十六号	7年9月	7年7月6日	大男の岸田吟香を背負う台湾土人	一憲斎芳幾	具足屋
9	東京日々新聞 七百八十一号	7年9月	7年8月26日	江戸っ子が百姓の非難で自分の糞を持ち帰る	一憲斎芳幾	具足屋
10	東京日々新聞 第壹号	7年10月	5年2月21日	旅の僧侶慶山が貞女を強殺	一憲斎芳幾	具足屋
11	東京日々新聞 第三号	7年10月	5年2月23日	夜嵐お絹、役者の嵐璃鶴と共謀、夫を毒殺	一憲斎芳幾	具足屋
12	東京日々新聞 百十一号	7年10月	5年6月23日	沼津の大火で関取が火中に電柱(電信)を守る	落合芳幾	具足屋
13	東京日々新聞 三百二十二号	7年10月	6年3月22日	福島の高田氏が老母のため深溪に氷を求む	一憲斎芳幾	なし
14	東京日々新聞 四百二十八号	7年10月	6年7月19日	新潟の芸妓が駆け落ちし自殺未遂	一憲斎芳幾	具足屋
15	東京日々新聞 四百九十一号	7年10月	6年9月28日	熊谷県の瀧次郎が母娘三人と姦通	一憲斎芳幾	具足屋
16	東京日々新聞 五百十二号	7年10月	6年10月22日	沼野氏と娘倉子が兇賊相手に奮戦	一憲斎芳幾	具足屋
17	東京日々新聞 六百八十七号	7年10月	7年5月14日	佐賀の乱で敗死した夫の後を追う妻子が自害	一憲斎芳幾	具足屋
18	東京日々新聞 六百八十九号	7年10月	7年5月16日	彰義隊七回忌の施餓鬼	落合芳幾	具足屋
19	東京日々新聞 七百十二号	7年10月	7年6月10日(号外)	台湾の石門で日本軍勝利	一憲斎芳幾	具足屋
20	東京日々新聞 七百二十三号	7年10月	7年6月23日	茨城県での女敵討ち	一憲斎芳幾	具足屋
21	東京日々新聞 七百二十六号	7年10月	7年6月26日	台湾の牡丹族の少女和服を着せられる	一憲斎芳幾	具足屋
22	東京日々新聞 七百四十二号	7年10月	なし	知的障害のある弟と老母に尽くす孝子・山下民蔵	一憲斎芳幾	具足屋
23	東京日々新聞 七百四十八号	7年10月	7年7月20日	大阪で三井呉服店員、苛めに耐えかね番頭らを斬る	一憲斎芳幾	具足屋
24	東京日々新聞 七百五十二号	7年10月	7年7月25日	台湾の牡丹族が日本軍に帰順する	一憲斎芳幾	具足屋
25	東京日々新聞 八百十三号	7年10月	7年10月2日	女として育ち男と結婚した男性	一憲斎芳幾	具足屋
26	東京日々新聞 八百二十二号	7年10月	7年10月12日	妻が忍入り、夫が子守りする泥棒夫婦	一憲斎芳幾	辻文
27	東京日々新聞 八百三十三号	7年10月	7年10月24日	巡查、下宿で揚弓場の女三人を殺害	一憲斎芳幾	具足屋
28	東京日々新聞 八百四十七号	7年10月	7年11月12日	「皇国支那和議決約の図」(「」は元記事にある見出し。以下同)	一憲斎芳幾	辻文
29	東京日々新聞	7年10月	なし	「日報社台湾記事石門口戦勝の図」	一憲斎芳幾	具足屋
30	東京日々新聞 八百二十四号	7年11月	7年10月14日	強盗の美少年が侵入先の芸者にたしなめられる	一憲斎芳幾	具足屋
31	東京日々新聞 八百三十八号	7年11月	7年10月29日	義孫に子を生まれ、妻とした老人	一憲斎芳幾	具足屋
32	東京日々新聞 九百号	7年11月カ	7年12月27日(890号)	浅草の悪徳医師幸庵が妻を虐待	一憲斎芳幾	具足屋
33	東京日々新聞 七百八号	7年12月	なし	売れっ子芸妓の蓄財を夫が使い込む	一憲斎芳幾	具足屋
34	東京日々新聞 八百五十六号a	7年12月	7年11月22日(858号)	関取小柳常吉が詐欺に遭う	一憲斎芳幾	具足屋
35	東京日々新聞 八百六十一号	7年12月	7年11月25日	志摩の国で三つ子の女子が誕生	一憲斎芳幾	具足屋
36	東京日々新聞 八百六十五号a	7年12月	7年11月29日	摂州天王寺で元農兵長の益田氏が盗賊を退ける	一憲斎芳幾	具足屋
37	東京日々新聞 八百八十五号	7年12月	7年12月22日	婆々同士の焼餅喧嘩	一憲斎芳幾	なし
38	東京日々新聞 八百九十二号	7年12月	7年12月29日	女が不倫相手の鼻を切り落とす	一憲斎芳幾	具足屋
39	東京日々新聞 九百十九号b	8年1月カ	8年1月28日	信州上田の商人が、碓氷峠で夫婦に鈍で殺される	一憲斎芳幾	辻文
40	東京日々新聞 九百二十三号b	8年1月	8年1月22日	小野組の手代三人の使い込み発覚	一憲斎芳幾	具足屋
41	東京日々新聞 九百十四号	8年1月	8年1月23日	梅毒の男の枕元でおたきあげ	一憲斎芳幾	なし
42	東京日々新聞 九百十一号a	8年1月	8年1月18日(910号)	三田の佐倉氏が強盗五人を退散させる	一憲斎芳幾	具足屋
43	東京日々新聞 九百十七号b	8年1月カ	8年1月26日	息子を狙う大鷲を父が鉄砲で射殺	一憲斎芳幾	辻文
44	東京日々新聞 九百四十号b	8年2月	8年2月22日	家付きの嫁を間男と共に追い出す夫	一憲斎芳幾	具足屋
45	東京日々新聞 九百四十四号	8年2月	8年2月26日	人力車夫が機転をきかせ盗から客の財布を守る	一憲斎芳幾	具足屋
46	東京日々新聞 九百十一号b	8年2月	8年1月19日	隣の女房が亡妻に扮し金品を騙し取る	一憲斎芳幾	具足屋
47	東京日々新聞 九百四十号a	8年3月	8年2月22日	新富町の芝居小屋舞台下で男が捕まる	一憲斎芳幾	辻文
48	東京日々新聞 九百六十九号	8年3月	8年3月26日	芸者が火消衣装を着て男装し、罰金刑	一憲斎芳幾	具足屋
49	東京日々新聞 九百二十六号b	8年3月	8年2月6日	村芝居の最中に銃で撃たれ死亡	一憲斎芳幾	具足屋
50	東京日々新聞 九百十三号a	8年3月カ	8年1月22日	中仙道熊谷宿で客と女郎の狂言心中	一憲斎芳幾	具足屋
51	東京日々新聞 九百六十四号	8年4月	8年3月20日	江ノ島弁財天臨時大祭と旅館・あびす屋の案内	一憲斎芳幾	具足屋
52	東京日々新聞 九百七十五号	8年4月	8年4月2日	左官が薄情芸者を刺殺	一憲斎芳幾	具足屋
53	東京日々新聞 九百七十八号	8年4月	8年4月6日	長州の呆れたインキ宗教、おすゑ稲荷	一憲斎芳幾	具足屋
54	東京日々新聞 九百八十一号	8年4月	8年4月9日	巡查と妻の密通現場を夫がおさえる	一憲斎芳幾	具足屋
55	東京日々新聞 九百八十二号	8年4月	なし	出戻り娘が輪姦される	一憲斎芳幾	具足屋
56	東京日々新聞 九百九十二号	8年4月	8年4月22日	武州の山中で娘に金比羅様のがりうつる	一憲斎芳幾	具足屋
57	東京日々新聞 千五十二号b	8年4月	8年6月27日	浜松県土族田中金吉の親孝行	一憲斎芳幾	具足屋
58	東京日々新聞 千九号	8年8月	8年5月10日	陰癩の男、死女を姦す	一憲斎芳幾	具足屋
59	東京日々新聞 千二十七号	8年8月	8年5月30日	娘が親に妊娠を疑われて自殺	一憲斎芳幾	具足屋
60	東京日々新聞 千三十六号a	8年8月	8年6月8日	79才甚助と67才お犬の老いらくの恋	一憲斎芳幾	具足屋
61	東京日々新聞 千三十六号b	8年8月	8年6月9日	泥棒が素人に追い剥がれた話	一憲斎芳幾	具足屋

62	東京日々新聞	千四十三号	8年8月	8年6月17日	木賃宿で士族の妻に老人が出来心をおこす	蕙齋芳幾	具足屋
63	東京日々新聞	千四十五号	8年8月	8年6月19日	老婆の遺産をねらい鬼に扮し脅した親戚が毒餅で死亡	蕙齋芳幾	具足屋
64	東京日々新聞	千四十七号	8年8月	8年6月22日	同僚の男と密通した妻を夫が殺し割腹自殺	蕙齋芳幾	具足屋
65	東京日々新聞		9年11月22日	なし	「山口縣下賊徒追討図」	静齋芳邨	具足屋
66	東京日々新聞		9年12月	なし	思案橋の暴徒事件	静齋芳邨	福田熊次郎 (具足屋)
67	東京日々新聞		9年12月	なし	「鹿兒島暴徒等熊本縣安政橋夜討図」	静齋芳邨	福田熊次郎 (具足屋)
68	東京日々新聞		9年12月25日	なし	「茨城県下賊民之話」	早川松山	福田熊次郎 (具足屋)
69	東京日々新聞	百八十五号	なし	なし	越後の小林氏が流刑の兄のため血書を提出	一蕙齋芳幾	具足屋
70	東京日々新聞	四百三十一号	なし	6年7月23日	強盗に永代橋から川へ投げこまれた娘を救助	一蕙齋芳幾	具足屋
71	東京日々新聞	五百六十六号	なし	なし	本田留平による旅宿の近代化	蕙齋芳幾	具足屋
72	東京日々新聞	五百九十二号	なし	7年1月26日	盲目の夫を行商と三味線門付けで養う妻に褒賞金	蕙齋芳幾画	具足屋
73	東京日々新聞	六百五十六号	なし	7年4月9日	捕縛直前の江藤新平	蕙齋芳幾	具足屋
74	東京日々新聞	六百九十四号	なし	7年5月22日	俳優の坂東三根二と芝居茶屋の娘が心中	一蕙齋芳幾	具足屋
75	東京日々新聞	六百九十七号	なし	7年5月24日	船火事を逃れた船員が大ザメに呑み込まれる	蕙齋芳幾	具足屋
76	東京日々新聞	七百五十四号	なし	7年7月27日	炭団売りの老婆、京都の芸妓を叱る	一蕙齋芳幾	具足屋
77	東京日々新聞	八百三十二号	なし	7年10月23日	浅草寺で巡査が凶賊と大捕物	蕙齋芳幾	具足屋
78	東京日々新聞	八百四十九号	なし	7年11月12日	日章旗を飾り清国との和議を祝う一家	蕙齋芳幾	辻文
79	東京日々新聞	八百五十一号b	なし	7年11月14日	台湾で戦死した義弟の幽霊が現われる	一蕙齋芳幾	具足屋
80	東京日々新聞	八百五十一号a	なし	7年11月14日	台湾で戦死した義弟の幽霊が現われる (異版)	一蕙齋芳幾	具足屋
81	東京日々新聞	八百五十六号b	なし	7年11月19日	欲深い継母の所業で妾に出された養女が自殺	蕙齋芳幾	具足屋
82	東京日々新聞	八百六十号	なし	7年11月24日	楠公権助論を続ける朝野新聞へ皮肉めいた賛辞	蕙齋芳幾	具足屋
83	東京日々新聞	八百六十二号	なし	7年1月26日	情死した娘と息子の婚礼をする親	蕙齋芳幾	具足屋
84	東京日々新聞	八百六十五号b	なし	7年11月29日	犬のくわえた生首で殺人発覚	蕙齋芳幾	具足屋
85	東京日々新聞	八百七十三号	なし	7年12月8日	質屋に入った強盗を、巡査が格闘の末逮捕	蕙齋芳幾	具足屋
86	東京日日新聞	八百七十六号	なし	7年12月12日	秩父でおきた超常現象に剣豪も退散	蕙齋芳幾	具足屋
87	東京日々新聞	八百七十七号	なし	7年12月13日	病気の夫を間男と通じた妻が毒殺	蕙齋芳幾	具足屋
88	東京日々新聞	八百八十号	なし	なし	妻おふさの密通現場を夫が切りつける	蕙齋芳幾	具足屋
89	東京日々新聞	八百九十五号	なし	なし	相模国生沼外造がトカゲなど食す	蕙齋芳幾	具足屋
90	東京日々新聞	九百九号	なし	8年1月17日	人か狸か、少女の元に通う美少年	一蕙齋芳幾	具足屋
91	東京日々新聞	九百十二号	なし	8年1月20日	息子を襲う大蛇を父が退治	一蕙齋芳幾	具足屋
92	東京日々新聞	九百十七号a	なし	8年1月26日	吉備大臣を演じる市川団十郎	一蕙齋芳幾	具足屋
93	東京日々新聞	九百十九号a	なし	8年1月28日	上総国の富家佐久間氏が本家乗っ取りを図り失敗	蕙齋芳幾	具足屋
94	東京日々新聞	九百二十三号	なし	8年2月3日	農民の弁蔵がお雪の姦通に怒り、間男を撲殺	蕙齋芳幾	具足屋
95	東京日々新聞	九百二十六号a	なし	8年2月6日	屋根から落ちた娘と石に強盗が驚き退散	蕙齋芳幾	具足屋
96	東京日々新聞	九百三十三号	なし	8年2月14日	離縁された婿、妻の口を刀で串刺す	蕙齋芳幾	具足屋
97	東京日々新聞	九百三十四号	なし	8年2月15日	早川伊太郎が娼妓と無理心中を図る	蕙齋芳幾	具足屋
98	東京日々新聞	九百三十八号	なし	8年2月19日	新潟の呉服商仙次郎が、弟に殺される	蕙齋芳幾	具足屋
99	東京日々新聞	九百五十一号	なし	8年3月6日	遊郭で博徒同士が斬り合う大乱闘	蕙齋芳幾	具足屋
100	東京日々新聞	九百六十七号	なし	8年3月24日	米屋の女房が俵を投げつけ、強盗が退散	一蕙齋芳幾	具足屋
101	東京日々新聞	九百八十三号	なし	8年4月12日	恋人を見舞う娘を、頑固な父親が阻止	蕙齋芳幾	具足屋
102	東京日々新聞	九百八十四号	なし	8年4月13日	吉原で解放された遊女の夫が自殺	蕙齋芳幾	具足屋
103	東京日々新聞	九百八十八号	なし	8年4月17日	芝居の悪役が楽屋で客に殴られる	蕙齋芳幾	具足屋
104	東京日々新聞	九百八十九号	なし	なし	放蕩生活のため私娼となった妻を、夫が殺害	蕙齋芳幾	具足屋
105	東京日々新聞	千十五号	なし	8年5月17日	特大の熨斗を付けて、美人女房を間男に進上	一蕙齋芳幾	具足屋
106	東京日々新聞	千十六号	なし	8年5月18日	遺書を認め、放火自殺を図った入婿	一蕙齋芳幾	具足屋
107	東京日々新聞	千二十号	なし	8年2月6日	女房と子供三人を殺し士族の夫が自殺	一蕙齋芳幾	具足屋
108	東京日々新聞	千四十六号	なし	なし	夜の渡船場に芝居がかった狂乱の人妻が出現	蕙齋芳幾	具足屋
109	東京日々新聞	千五十二号a	なし	8年6月25日 (1050号)	雨中の相撲興業に勤心元が怒り、見物料を返させる	蕙齋芳幾	具足屋
110	東京日々新聞	千五十四号	なし	8年6月29日	毒殺事件で露見したお仲の悪業	一蕙齋芳幾	具足屋
111	東京日々新聞	千五十五号	なし	8年6月30日	不孝の妻が黒雲に一喝され、改心する	蕙齋芳幾	具足屋
112	東京日々新聞	千五十九号	なし	なし	狂気の商人が士族の首を切る	蕙齋芳幾	具足屋
113	東京日々新聞	千六十六号	なし	8年7月5日 (1059号)	87才の老女おたきが恋わずらい	蕙齋芳幾	具足屋
114	東京日々新聞		なし	なし	兵庫で吉岡氏が、おふさ他数名を殺害	蕙齋芳幾	具足屋

同じ号から2つの記事が引用されている作品があるため、文章の冒頭部1文字の五〇音順で、a・bとした。

1～68番までは発行年月順で並べ、69～114番は発行年号不明のため、元記事の番号順で並べた (佐藤：2001を参考とした)。

読者たちにも無縁ではなかった。平和な日常生活を営む庶民も、人間関係のもつれ・貧困・商売の失敗などが原因で犯罪を起こして破滅し、時には何の落ち度も無いにもかかわらず、犯罪に巻き込まれ、かけがえない人生を台無しにする可能性があった。錦絵新聞は、単に好奇心を満たすだけのメディアでなく、被害者の鎮魂や人々に日常的な自戒を促すメディアであった。

東京生まれの、新聞紙の記事をニュースソースとした錦絵新聞は、大阪にも波及し、東京のブームをしのぐ人気となる。大阪では日刊新聞紙が未発達で、引用新聞紙を持たない作品も登場した。錦絵新聞のブームは明治10年代になるとみるみるうちに下火となり、半ばにはほとんど見られなくなった。錦絵での時事的ニュースの伝達は新聞紙記事の引用に依らず、大事件を直接絵解きし、文章で説明したものとなっていく。明治10年の西南戦争の際には、戦況や西郷軍の内情を面白おかしく伝えた「時事錦絵」⁽¹⁴⁾が続々と出されていったのである。

一方、事件報道は『読売新聞』『東京絵入新聞』など絵入り・ふりがな付きの庶民向けのメディアである、小新聞で報じられた。新聞紙の記事を引用元とする錦絵新聞は、衰退に向かうこととなったと推定される。

Ⅲ イラストレーターによる 絵図のトレス

(1) デジタルトレスの可能性

近年、アドビ社のイラストレーターを使用したデジタルトレス作業が、一般化しつつある。イラストレーターは、デザイン分野を中心に広く使われてきた定番ソフトであり、決して初心者向けのものではないが、その利用価値は高く、画像と文章が複雑に入り混じった画像資料の解析に応用することができる。描画された曲線は、拡大縮小しても線が荒れない。一度パソコンで絵図をトレスしてしまえば情報の追加も容易で、利用し易い大きさに自由に拡大縮小ができる。近年はインクジェット式プリンターの性能が飛躍的に向上したため、高精度の画像も得られる。印刷原稿への利用も容易であり、自己のイメージに近い図版作成ができるのである。なお、博物館学芸員はイラストレーターに習熟することで、展示パネルやキャプション・簡易なポスター類を作成することができるため、現在は必

修のソフトとなりつつある。

以下では近世に作成された国絵図と普請絵図を使ったデジタルトレス事例を紹介する。

(2) 国絵図のデジタルトレス

今回は、東京大学史料編纂所が所蔵する国絵図資料のうち「伊豆国絵図」(内務省引継地図0003)のトレスを行った。国絵図とは、江戸幕府が諸国の主要大名に命じて作成・提出させた国ごとの巨大な絵図であり、検地の結果を記載した土地台帳である「郷帳」とともに、江戸幕府の紅葉山文庫に収納された。慶長・正保・元禄・天保の四期に大掛かりな国絵図作成が命じられた。

今回トレスした「伊豆国絵図」(図2)は、天保国絵図成立以降の写本と推測されている⁽¹⁵⁾。法量は170.4×283.4cmと巨大で、4×5判ポジフィルムで四分割撮影されている。本図では、そのうち下田付近を重点的にトレスした。下絵となる画像データはフォトショップ6.0を使用して、分割写真の解像度を落とし(1200dpi→600dpi)、データを軽くしてから一枚に結合しトレス用下絵とした。下絵の明るさなどを適宜調整した後、イラストレーターCS2によって下田付近の情報(海岸線・丘・文章・森林全て等)を洩らさぬようにトレスしている。

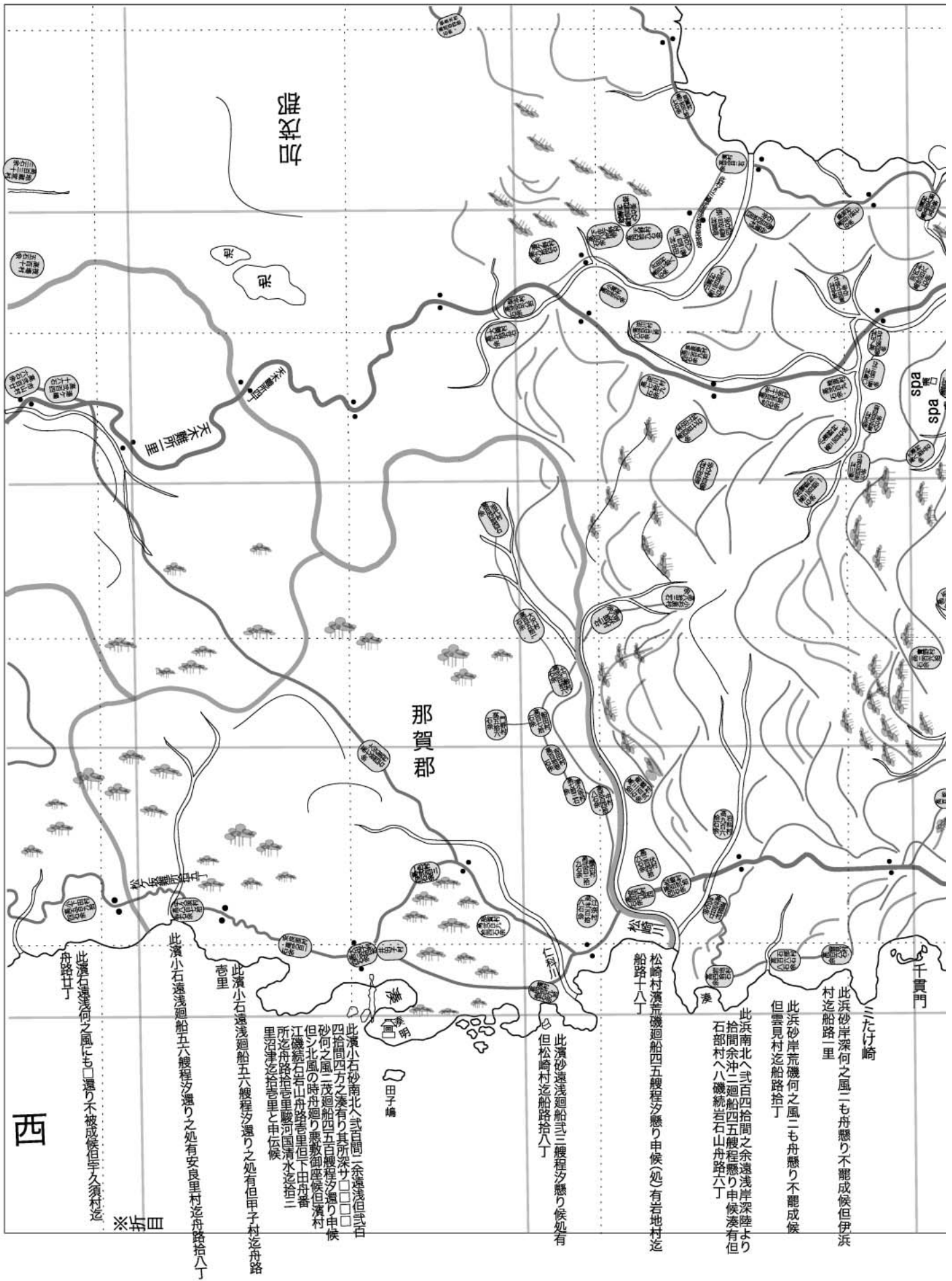
<トレスの概要>

1. レイヤーの作成 (図3)

下絵(レイヤー1)の上に、海岸線・川・主要道と国境・村高・山・文字・紙の継ぎ目と折り目・森など、10数種類のレイヤー(何枚も重ねることができる透明フィルムのようなもの)を作り、種別ごとにトレスしていく⁽¹⁶⁾。

2. 文章情報

「より」以外の漢字は極力旧字体とし、解読できない箇所は□とした。字の傾き、行数は忠実に再現した。道や川などに沿った、曲線状の文字列も再現が可能である。なお、今回のトレスでは、伊豆国に見られる特徴的な地形・人工物などを英語で入れた(例:崖=cliff、隧道=tunnel、温泉=spaなど)。これは、将来数十枚のトレス画像が蓄積された際、それらをPDFファイル化し、専用ソフトで横断検索可能とする場合に、英語でも検索できる様にするための試みである。





Izu, Kamo-gun , Naka-gunseaway, cliff, harbor, myojin-shrine , spa

図2 「伊豆国絵図」(東京大学史料編纂所蔵 内務省引継地図 0003) 170.4×283.4cm
 ※本図は、科研費・基盤A「地図史料学の構築 —前近代地図データ集積・公開のために—」(代表、杉本史子)の成果の一部である。なお、図を見やすくするため、中央部分の情報を一部重複させている。



図3 「伊豆国絵図」のトレスにおけるレイヤー構造 (イラストレーターCS2)

3. 村

国絵図では、村は楕円で描かれ、楕円内に村名と石高が書かれる。これらを解釈し、楕円の傾きも忠実に再現した。

4. 木々と山

木々は典型的な表現なので、雛形を作成し、「コピー・貼り付け・回転・拡大縮小」で処理した。山々の色は今回はモノクロ画像のため識別できないが、原図では「緑」「茶」「灰色」の3色で、線とグラデーションで描き分けられている。絵図どおりのグラデーション表現も可能だが、図が見にくくなるので線のみとした。

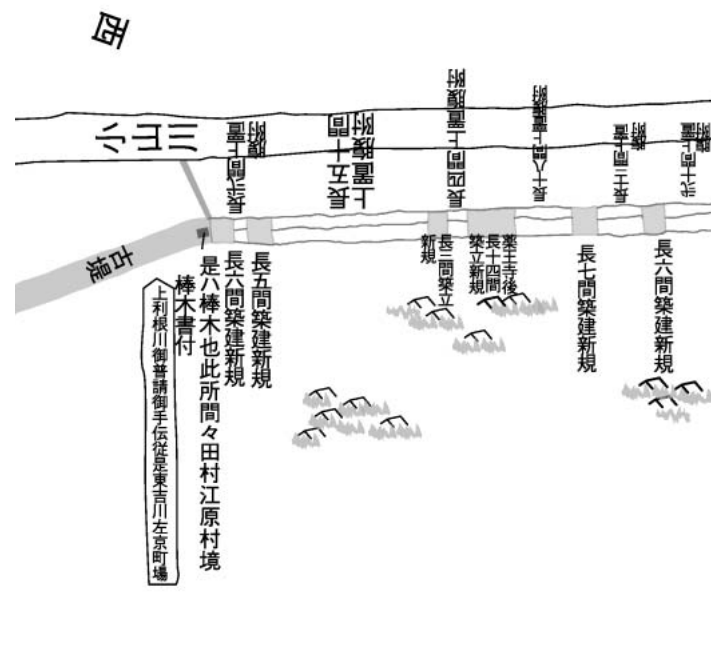
5. 紙の継ぎ目と折り目

絵図の折り目・紙の継ぎ目も正確にトレスすることが望ましいが、写真からでは判読が難しく、おおよそに留めている。トレス図を元に実見調査の際に記録し、デジタルデータに反映させることとなるだろう。

(3) 寛保洪水普請絵図のトレス

寛保2 (1742) 年7月末から8月初旬にかけて、近畿・関東・東北地方は大洪水に見舞われた。いわゆる「寛保水害」である。江戸幕府は寛保2年10月6日、関東地方の被害場所の御手伝普請を西国大名11名に命じた。この際、上利根川の南側の工事は萩藩主松平(毛利)大膳大夫宗広に命じられたが、先例によって周防岩国(現、山口県岩国市)の吉川左京経永(6万石)が萩藩のうちに含められ、武蔵国幡羅郡妻沼(現、埼玉県熊谷市)付近の普請を行った。吉川家の史料を所蔵する岩国徴古館には、利根川上流部南側の村々の災害

図4 「武州幡羅郡間々田村御普請所絵図」 (岩国徴古館蔵。53×103cm) トレス図 (イラストレーターCS2 による)

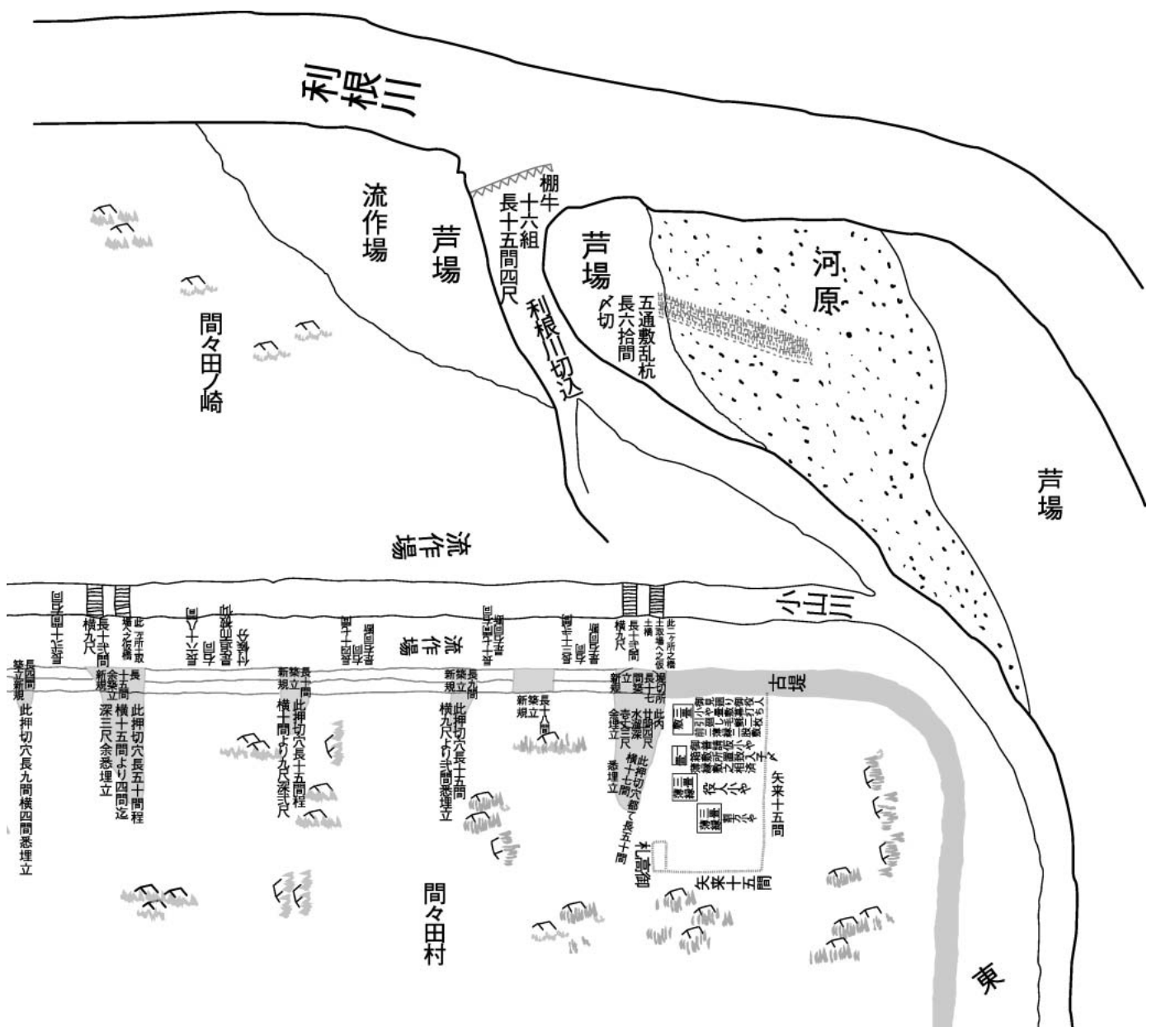


復旧に関する絵図が残されており、当時の水制工法や破堤箇所状況などについて知ることができる。

今回は『武州幡羅郡間々田村御普請所絵図』(岩国徴古館蔵)をデジタルトレスした。図2の「伊豆国絵図」同様、数枚のレイヤーを作成し、トレス作業を行っている(図4)。

<デジタルトレスデータの活用>

国絵図は大型のものが多く、頻繁に取り出し、閲覧することは困難で、原史料を傷めることにもなる。したがって、大型のポジフィルムで撮影し、フィルムをスキャナーでパソコンに取り込み、モニター上で閲覧することが行われている。近年のパソコンの進化で、数ギガバイトの大容量の画像データでもストレスなく



閲覧することが可能となり、ネット上での閲覧も可能となっている。一方、本稿の2つのトレス作業で示したように、絵図上の情報を抽出して解析するため、デジタルトレスによって線画と解読文章だけの線画データとすると、カラー画像であっても、データ量は数百メガバイト程度の軽さとなり、解析が容易となる。⁽¹⁷⁾ 大量に作成したトレスデータを、標準的な電子ファイル形式のPDFファイルとし、専用ソフトを使うことで文章情報の検索も可能になっている。これはトレスした画面上に乱雑に書かれた文字情報を検索可能とする技術である。また、トレス画像とGISソフトを組み合わせて、近世村落の変遷、村高の変化、土地利用の分析を行う試みも行われていくだろう。

おわりに

以上、歴史民俗資料学研究におけるパソコン利用の実例を紹介した。やや文章が冗漫となったため、要点を箇条書きとしてまとめたい。

1、パソコンと周辺機器の高性能化・低価格化は今後も続き、人文科学系研究者は必要に応じ、それらを使いこなさなければならない。

また、著者は地域博物館に勤務しているが、博物館学芸員にもより高度のパソコン技術が求められている。⁽¹⁹⁾

2、デジタルカメラは進化が特に著しく、フィルムカメラを凌駕しつつある。しかし、画像資料の撮影と保存に関しては、フィルム撮影は安定した技術であり、

原史料はブローニー判以上のサイズで撮影し、後世へのモノ資料とするべきである。

3、画像資料のデジタル化は、古文書の全文解読・画像のデジタル化を行う基本的なものから、より高度な解析を行う段階へと入った。それは、本稿で一部を紹介した、「素朴な錦絵データベース」を作るだけでよしとするのではなく、それを研究論文の形で広く世に問うことである。そして、本稿では深化する研究情況の一例として、従来はハンドトレスで行っていた絵図資料や、文章と画像が複雑に入り混じった画像資料をデジタルトレスして共有化した事例を示した。今後は、より高度な地図系ソフトを使って解析・研究を進められよう。

4、研究機関が所蔵する「画像資料」をはじめとする「非文字資料」の公開は年々進んでおり、インターネット環境の向上によって、動画データファイルもダウンロードが可能となっている。大学などの研究機関が無料で大容量の画像データ公開することのみならず、そ

れらを使った研究成果の発信が求められている。⁽²⁰⁾

今後も研究機関において、パソコンを使用した画像資料のデジタル化と公開が進むと考えられる。次の段階としてそれらのデータを個人研究のなかで結実させ、よりレベルの高い研究を行っていかねばならない。各種の機器・ソフト、高速のネット環境・文献資料を蓄積し、各研究者の努力によって、数々の成果を生んだ本学COEプログラムが、「非文字資料」を使った独創的な研究を国内外へ発信する拠点として、また若手研究者育成・院生教育の場として活用されることを切に希望する。

(とみざわ・たつぞう)

※本稿は科学研究費補助金（若手研究【B】）「幕末維新期の時事錦絵・かわら版の終焉と、近代庶民メディアの誕生」の成果の一部である。

【注】

- (1) デジタルカメラも万能ではない。現在主流のJPEG形式の画像は広く使われているが、数十年後この方式が一般的な画像ファイル方式か否かは不明である。また、デジタル画像はハードディスクやDVD、USBメモリーに数百～数千枚を記録することができるが、記録媒体自体の破損や「記録媒体の小型さ」ゆえに紛失することも多い。一方、撮影したフィルムは、それ自体が「モノ資料」であり、整理にはある程度のスペースが必要で、調温・調湿などを考慮した保存作業も煩雑である。しかし、それらの「面倒さ」がモノ資料としての存在感を意識させている。また、フィルムをデジタル化するスキャニング技術は年々進化し、高精細のデジタル画像を得ることができる。予算的余裕がある際、画像資料はブローニー判以上のポジフィルムで撮影することが望ましい。
- (2) 本稿では、錦絵新聞の用語を使用する。（千葉市美術館編・富澤達三解説：2008、5）参照。
- (3) 本学COEには各種スキャナーがあるが、A3判以下の画像資料ならば、直接スキャンが最も簡単に高解像度のデジタル画像を得る方法である。
- (4) 「時事錦絵」の概念については、（富澤：2004a 21-23）参照。
- (5) 奈倉：2004 参照。
- (6) 「はしか絵」のデジタルデータベース化については、（富澤：2004b 242-245）を参照のこと。
- (7) 江戸時代、庶民向けの出版物を制作・販売した業者。
- (8) 木下：1996、61。
- (9) 長野県の開智小学校の装飾には、錦絵版『東京日々新聞』のものと同様な天使が使われている。また、現在も使用されている森永製菓の「エンゼルマーク」が商品広告として登場したのは明治40年代のことである。
- (10) 錦絵新聞の研究は、土屋礼子氏の一連の研究に詳しい。（土屋：1995、2000、2002）など。
- (11) 土屋：1995、2000を参照。デジタルデータベースが完成しているとはいえ、可能な限り基礎データとなる錦絵新聞の現物、新聞紙の復刻版にあたるべきである。なお、2007年時点では土屋礼子氏・文生書院のご好意により、錦絵版『東京日々新聞』の高精細デジタル画像を使用し画像解析をおこなっている。
- (12) 株式会社岡島新聞舗：1936、36-39。
- (13) 土屋氏・佐藤氏それぞれの論は（『ニュースの誕生』、14-16、102-104、283-285）に詳しい。
- (14) 西南戦争関連の錦絵も100種類以上が知られ、「報道絵」とする説もある。また原田敬一氏は、吉田暎二氏の議論を踏まえ、明治期の錦絵に「時事絵」のジャンルが生まれたとしている。（原田：2000、30）
- (15) 国絵図研究会：2000、82。
- (16) トレス作業には、ペン型の入力機器を使ったタブレットが便利である。B5サイズ以上の大きさのタブレットを使うことで、絵を描く感覚でトレス作業を行い、作業時間を大幅に短縮することができる。
- (17) 今回は図を見やすくするため、村名・石高、海岸線付近の文字のポイントをやや大きめにした。

- (18) 地理情報システム (GIS=Geographic Information System) のことで、地理的位置に関する情報を総合的に管理・加工し、かつ視覚的に表示し、高度な分析や迅速な判断を可能にする技術である。現在GISソフトは操作が難しく値段も高いが、地理学以外の研究者にも活用が望まれる。
- (19) 具体的には「文書作成・プレゼンテーション系」…ワード・エクセル・パワーポイント。「画像系」…フォトショップ・イラストレーター。「データベース系」…アクセス・ファイルメーカーが使用できることが望ましい。また、企画展などや博学共同授業などでもキャプションやパネルを自作しなければならない状況は多々あり、上記のソフトを駆使できることは、学芸員にとって必須である。また、カメラの基本的な理論（絞りと被写体深度の関係など）を理解していることが必要である。
- (20) 電子すかしなどの盗用防止加工も行われているようであるが、画像が「悪用」されたという事例は聞かない。公開された画像を個人のパソコンにダウンロードし、個人的なデータベースを作り、解析している研究者がほとんどであろう。なおホームページ上の画像を直接、論文・出版物などへ転用を許可する機関は少なく、従来どおりにポジフィルム・紙焼きを使用させることが多い。

【参考文献】

文公輝

1998「錦絵・錦絵新聞にみる朝鮮・中国へのまなざし」『大阪人権博物館紀要』第2号 大阪：大阪人権博物館

千葉市美術館編・富澤達三解説

2008「時事錦絵としての『錦絵新聞』」『文明開化の錦絵新聞—東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』 東京：国書刊行会

藤原恵

1967「明治の錦絵新聞について」『関西学院大学共同研究紀要Ⅰ 明治研究』大阪：関西学院大学

原秀成

1990「新聞錦絵と錦絵新聞—その出版の状況と構造の変化—」『年報・近代日本研究12 近代日本と情報』 東京：山川出版社

原田敬一

2000「近代の描き方—錦絵の世界」『幕末維新を考える 佛教大学鷹陵文化叢書2』 京都：思文閣出版

ジャーナリズム史研究会

1985『新聞錦絵 文明開化の事件簿』 東京：板橋区立美術館ほか

株式会社岡島新聞舗

1936『大阪の新聞』（非売品）

葛飾区郷土と天文の博物館

2007『諸国洪水・川々満水 —カスリーン台風の教訓—』 東京：葛飾区郷土と天文の博物館

木下直之

1996『写真画論 写真と絵画の結婚』 東京：岩波書店

木下直之・吉見俊哉編

1999『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』 東京：東京大学出版会

北原糸子・佐藤健二・吉見俊哉監修

2000『CD-ROM ニュースの誕生 東京大学社会情報研究所小野秀雄コレクション かわら版・新聞錦絵データベース』 東京：トランスアート

国絵図研究会

2005『国絵図の世界』 東京：柏書房

奈倉哲三

2004『諷刺眼維新変革 民衆は天皇をどう見ていたか』 東京：校倉出版

小野秀雄

1972『新聞錦絵』 東京：毎日新聞社

佐藤かつら

2006「歌舞伎と錦絵新聞」『浮世絵芸術』No.146 東京：国際浮世絵学会

佐藤健二

2001「社会調査データベースと書誌学的想像力」『社会情報』11(1) 札幌：札幌学院社会情報学部

高橋克彦

1993『新聞錦絵の世界』 東京：角川書店

土屋礼子

1995『大阪の錦絵新聞』 東京：三元社

2000『CD-ROM 日本錦絵新聞集成』 東京：文生書院

2002『大衆紙の源流 明治期小新聞の研究』 京都：世界思想社

富澤達三

2004a 『錦絵のちから 時事的錦絵とかわら版』 東京：文生書院

2004b 「歴史資料のデジタル化 画像資料を例として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集 千葉：国立歴史民俗博物館

氏家幹人

1999 「心の開照らし出す新聞錦絵」『読売新聞』（東京版、夕刊）1999年11月17日号

吉見俊哉・土屋礼子監修

2001 『明治のメディア師たち 錦絵新聞の世界』 神奈川：日本新聞博物館